

## 【別添 2】

28	神戸大学附属幼稚園 外1校	H29～R1
----	---------------	--------

### 令和元年度研究開発自己評価書

#### I 研究開発の内容

##### 1 教育課程

###### (1) 編成した教育課程の特徴

本校園では、今年度から、3歳から11歳までの9年間の初等前期、初等後期の2つの期で構成し、各期における発達を踏まえた教育課程を編成した。

延長指定2年目において導き出した「発達の節目」を基に、3歳（幼稚園年少）から7歳前半（小学校第2学年前期）までを初等前期、7歳後半（小学校第2学年後期）から11歳（小学校第6学年）までを初等後期としている。各期における教育課程の具体を以下に示す。

###### ① 初等前期

初等前期にあたる3歳（幼稚園年少）、4歳（幼稚園年中）、5歳（幼稚園年長）、6歳（小学校第1学年）、7歳前半においては、それぞれ「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」における内容を包含した表1に示す「資質・能力カリキュラム」を実施した。6歳に関しては、幼稚園での学びを生かし、幼稚園、小学校のつながりを意識した単元構想を行った。これにより、幼稚園と小学校の教育課程上の接続を可視化することができ、指導方法についても接続を図ることができると考えた。

###### ② 初等後期

初等後期にあたる7歳後半（小学校第2学年後期）においては、「小学校学習指導要領」の「各教科等」に加え、英語に親しむと共に、広く「せかい」のあり様に子ども達が触れ合うことを重視するため、「せかい領域」を新設した教育課程を実施する。

同じく初等後期にあたる8歳（小学校第3学年）、9歳（小学校第4学年）、10歳（小学校第5学年）、11歳（小学校第6学年）においては、グローバル社会における共通コミュニケーション言語である英語を主とし、外国語と自国も含めた文化について、広く実践的に学んでいく教科としての「グローバル科」を新設した教育課程を実施する。「グローバル科」は、外国語活動における内容を包含したものとして編成することとし、外国語活動は第3・4・5・6学年の教育課程から割愛する。

表1 資質・能力の定義一覧

資質・能力の大きなまとまり定義	【資質・能力のまとまり】定義	資質・能力	資質・能力の定義	
社会的 資質・能力	【自分の生き方】 様々なかかわり合いの中で、自分を見つめ、したいことやすべきことを自分で決め、よりよい生き方を目指そうとする	自ら決める・選ぶ	興味・関心をもったり、目的や目標を定めたりして、その実現に向けて見通しをもち、やり遂げようとする	
		自分に満足する	自分の成長を自覚し、自らの価値に気付く	
		気持ちをコントロールする	よりよい方向に向けて、自分の気持ちに折り合いをつけようとする	
		よりよい自分に向かう	よりよい方向に向けて、した方がよいと思うことをしようとする	
		他者という喜びを感じる	他者とかかわる心地よさや嬉しさ、よさを感じてつながりを大切にしようとする	
	【人とのつながり】 人とかかわることを通して、他者の思いや考えに気づき、よりよい関係をつくろうとする	他者のことを知る	他者に関心をもち、思いや考え、個性を認めようとする	
		自分のことを伝える	相手にわかるように、自分の思いや考えを行動や言葉で伝えようとする	
		他者のことを考えて行動する	他者に寄り添い、相手にとってよいと思うことをしようとする	
		他者を称賛する	他者のよさや頑張りや気づき、ほめ讃えようとする	
		人と協力・共同する	人と共通の目的や目標に向かって、自分にできることをしようとする	
人格形成の基礎となる資質・能力	【心身の健康を保つ】 心身の成長や変化、周囲の状況に気づき、安心で健康な生活をつくる	心の健康を保つ	自分の心の居場所を探り、安心しようとする	
		体の健康を保つ	健康の保持・増進に関心を持ち、必要なことを考え、自分ができようとする	
	【人と自然とのあり方みつめる】 豊かな自然体験を通して、その美しさや不思議さに触れる中で、自然や生命に対する理解を深め、望ましい自然観・生命観を養う	身を守る	自分の状態や周囲の状況に気づき、安全について考え行動しようとする	
		身体を操作する	運動の特性に応じた身体の使い方をしようとする	
	【事象を科学的にとらえる】 ものがもつ性質やものやこと同士の関係のなかで起こる現象に対して、科学的に分析・思考しながら法則を見いだす	自然環境をみつめる	空や雲、土、天体など、自然環境の美しさや不思議さに触れる中で、自然に対する理解を深める	
		生き物・いのちをみつめる	生き物の美しさや不思議さに触れる中で、生命に対する理解を深める	
	固有的 資質・能力	【感動を表現する】 思いや世界観が表現されているもののよさを感じたり、イメージをふくらませ自分らしく表現することを楽しんだりしながら、豊かな感性を養う	造形に表す	色や形、素材の生かされ方のよさを感じたり、それらを使って表現しようとする
			音楽に表す	音の響き、リズム、テンポやメロディーのよさを感じたり、それらを使って表現しようとする
		【言語を適切に活用する】 文字言語や音声言語を獲得し、思いや考えを適切に伝えようとする	文芸に表す	話の展開や内容、言葉のよさを感じたり、それらを使って表現しようとする
			身体の動きに表す	動作や表情、声の調子などのよさを感じたり、それらを使って表現しようとする
【事象を数理的にとらえる】 数・量や図形、場を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする		演出に表す	配役や場のとり方、プログラムの順序などのよさを感じたり、それらを使って表現しようとする	
		語彙・語句を適切に活用する	語彙・語句を豊富に獲得し、活用しようとする	
【くらしをつくる】 くらしを豊かにするための要素や方法について考え、取り組もうとする		文章の構成を整える	文章の構成を考えて、整えようとする	
		文字を適切に書く	文字を正しくとらえ、書こうとする	
知性につながる 資質・能力		【事象を数理的にとらえる】 数・量や図形、場を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする	言葉を適切に使い分ける	言葉の使い方を考えて、使い分けようとする
			形を数理的にとらえる	図形を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする
	【くらしをつくる】 くらしを豊かにするための要素や方法について考え、取り組もうとする	数・量を数理的にとらえる	数・量を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする	
		空間を数理的にとらえる	場を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする	
	【社会とのつながりを築く】 自分たちの生活を支える人・もの・ことについて知り、持続可能な社会の実現を目指そうとする	食をみつめる	食べることの楽しさや有難さを感じたり、様々な食文化について知り、取り入れたりする	
		衣類を整える	衣類の役割や衣文化について知り、心地よく整えたり、場や状況に合った着用をしたりする	
	【社会とのつながりを築く】 自分たちの生活を支える人・もの・ことについて知り、持続可能な社会の実現を目指そうとする	道具をあやつる	目的に合った物を選び、適切に使おうとする	
		住空間を整える	快適で心地よい生活空間を知り、整える	
	【社会とのつながりを築く】 自分たちの生活を支える人・もの・ことについて知り、持続可能な社会の実現を目指そうとする	財を活用する	売買の仕組みやサービスについて知り、お金を適切に扱う	
		多様な文化を尊重する	自国の文化や他国の文化のよさや互いの文化の違いを知り、認めようとする	
汎用的 資質・能力	【論理的思考力】 ものごとを整理し、順序よく考える力	施設や働く人とのつながりをもつ	施設や働く人の役割を知り、自分のかかわり方を考える	
		資源の活用をみつめる	限りあるものの適切な使い方や使う量を考え、大切に扱おうとする	
	【問題解決力】 問題を見出し、解決方法を導き出し、実行する力	過去とのつながりをとらえる	社会や文化の発展を歴史の流れとのかかわりでとらえる	
		土地の特色をとらえる	日本や世界の地域の諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえる	
	思考力	平和を求め	争いや差別の原因を探り、人とのかかわり方を考える	
		メディアを活用する	情報媒体を用いて、思考・判断に必要な情報を収集し、記録・発信するために使おうとする	
	思考力	比較する	対象と視点を明確にししながら、差異点や共通点を見つけ出す	
		関連付ける	対象と視点を明確にししながら、その間にあるつながりを見つけ出す	
	思考力	総合する	比較したり関連付けたりしたことをもとに、考えをまとめる	
		再構成する	自分の知識や考えを、より妥当性の高いものに更新する	
思考力	推論する	比較・関連付けて得られた明確な根拠をもとに、何らかの考えにいたる		
	論点を抽出する	話の中心になるところを探り、目的に応じて絞り込み、確定する		
思考力	批判的に考える	思考・判断に必要な情報の確かさを疑う		
	自分を客観的に把握する	自分のことについて自分自身が気付く		
思考力	問題を認識する	ある目的を達成するための問いを生む		
	豊かに発想し、追求の手立てを構想する	ある目的を達成するための方法を直感的・論理的に考え、最適な考えを選び実行をもとに、目的が達成されたかどうかその過程が適切であったかどうかを評価する		
思考力	実行し、その結果をもとに判断をくだす			

## (2) 教育課程の内容は適切であったか

### ○社会的資質・能力、固有的資質・能力、汎用的資質・能力の定義を定める

各期の教育課程を構成する資質・能力は共通に設定し、子どもの学びの姿を実践記録として集積し、「9年間を見通しためざす姿」を描くことを目指し、これまで取組を進めてきた。今年度、幼小の教員が集まり、「9年間を見通しためざす姿」や実践記録を基に、社会的資質・能力、固有的資質・能力、汎用的資質・能力に定義を置くことができた(表2)。これにより、本園の教育目標から、社会的資質・能力、固有的資質・能力、汎用的資質・能力の教育課程での位置づけを明確にすることができた。

表2 3つの大きな資質・能力のまとまりの定義

資質・能力の大きなまとまり	定義
社会的資質・能力	人格形成の基礎となる資質・能力
固有的資質・能力	知性につながる資質・能力
汎用的資質・能力	思考力

### ○満3歳児のめざす姿の設定による3歳児の保育の充実

第2年次に各資質・能力の満3歳児のめざす姿を設定したことで、3歳児のめざす姿が資質・能力によっては新たに設定される等充実された。それに伴い、幼稚園教育課程の3歳児のねらいも同様に充実された。そのことで、3歳児クラスの保育においても、以前であればねらいに挙げていなかった資質・能力についても3歳児からねらいに挙げるようになった。それに向けて環境の構成や教師の援助を行うことにより、これまでより多様な資質・能力の発揮、伸長が見られるようになってきている。また、各資質・能力の満3歳児のめざす姿については、入園直後の1~3月生まれの3歳児学級の子どもの姿や保護者アンケートから検証を行い、確かめられている。

### ○初等前期の「資質・能力カリキュラム」

初等前期のカリキュラムについては、「10視点カリキュラム」を資質・能力のフィルターを通して検討することで再編成した「資質・能力カリキュラム」への完全移行を経て、生涯にわたって必要となる資質・能力の方向性をより意識したねらいを設定することが可能になった。このようなねらいの変化により、一つ一つの環境構成や教師の援助においても、資質・能力の発揮、伸長の方向性をより明確に意図する具体的な手立てになってきている。このことにより、資質・能力の発揮、伸長を支える幼児教育の中身をより明確に発信できることにも繋がっている。すなわち、社会に開かれた教育課程の実現が既に図れていることを意味しており、教育課程の内容は適切であると考えられる。

幼稚園では、実践記録とドキュメンテーションから得られた実践データを根拠にしたカリキュラム・マネジメントを継続して行なっている。実践記録とドキュメンテーションが根拠になり得るのは、それぞれに次の仕掛けをしているからである。実践記録においては、遊びや生活を通して、一人一人の子ども達が既に獲得している資質・能力を発揮し、互いに刺激し合うことでさらに一人一人の資質・能力の発揮が促され、それらが複雑に絡み合いながら資質・能力が伸長していく過程を可視化し、カリキュラムの改善に資する知見を集積する書式の開発を行っている。また、ドキュメンテーションにおいては、写真等を交えながら子どもの思考の過程を様々な手法で可視化していることに加え、学びを別枠で記述し、データとして活用しやすい工夫についても園全体の取組として継続している。さらに、カリキュラム・マネジメントを日常的に意識して行えるように、職員室内に初等教育要領、教育課程、月の指導計画を貼り出し、事実からの検討事項をいつでも書き込める状況を作る取組も継続している。これらの取組等により、カリキュラムの改善と教員の資質向上を一体的に進めている。

### ○「発達の節目」についての検証

各単元の終末に学習を振り返り、自分の学びについて自ら記述している「ふりかえりカード」の6,7歳時に記入したカードを集めた。そして、その「ふりかえりカード」の記述から「何を学んだのか」「単元目標に関して学んだこと」「生活にいかせる内容」について発達段階による質的な変化があるかを分析した。図1は、4か月ごとに、学習に対する計画や単元後の見通しに関する記述があった「ふりかえりカード」の割合をグラフ化したものである。7歳から、多くの子ども達の記述に変化が見られることから、「発達の節目」が7歳だといえるエビデンスを得た。

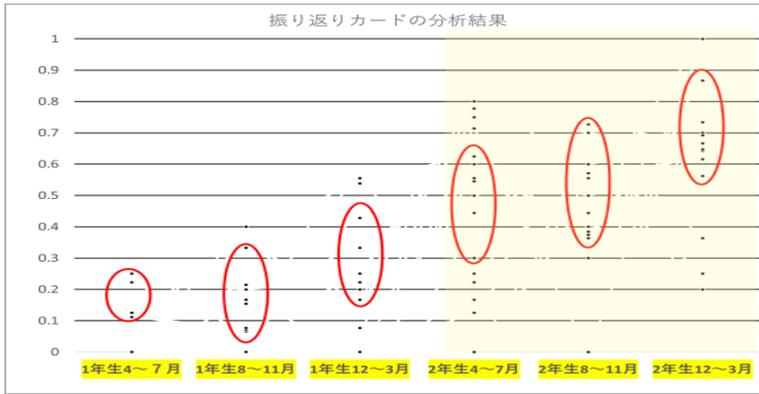


図1 ふりかえりカードの記述分析

### (3) 授業時間等についての工夫

昨年度同様、週時程の基本的枠組は、以下の通りである（表2）。

- ・6歳（第1学年）について、入学後1週間は、子ども達の体力を考慮し、授業時数を1日4時間とした。また、学習内容や幼稚園での生活からの穏やかな移行を考え、1単位時間45分の枠組を弾力的に運用した。
- ・6歳から11歳までの異年齢のかかわりが一層生まれるよう、縦割りグループを編成し、それぞれの計画に基づいて活動する単元「附小のみんなとつながりをふかめよう」を実施した。
- ・健康安全・体育的行事を含む単元「スポーツデーで仲間と一緒に全力を出し切ろう」、文化的行事を含む単元「みんなで一つのステージをつくりあげよう」は、プロジェクト型学習の形をとり、子ども達主体で行事を完成できるようにすることを目指している。そこで、各プロジェクトで集まり、会議をする時間を確保するために、それぞれの行事開催時期前の1か月程は休み時間を短縮し、学習後にその時間を確保してきた。

表2 学年別週時程表

	月	火	水	木	金	合計
6歳（第1学年）	5	5	5	5	5	25
7歳（第2学年）	5	5	6	6	5	27
8歳（第3学年）	5	5	6	6	6	28
9歳（第4学年）	6	5	6	6	6	29
10歳（第5学年）	6	5	6	6	6	29
11歳（第6学年）	6	5	6	6	6	29

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

幼稚園では、初等教育要領を基に、日々の遊びや生活を通した保育を実践する中で、多様な資質・能力を発揮、伸長している姿を明確にとらえ、そこから重点とするねらいを設定し、子どもの実態、発達に応じながら、多様な資質・能力の発揮、伸長に向けた環境の構成や教師の援助を行っている。特に、汎用的資質・能力の問題解決力、「問題を認識する」「豊かに発想し、追求の手立てを構想する」「実行し、その結果をもとに判断をくだす」をねらいに示すことにより、思考の流れを意識して保育の展開や環境の構成、教師の援助を検討し、実践することにつながっている。

6歳、7歳前半については、日々の学校生活の全てを、より子ども達の必要感に根差した学習にする必要があると考え、資質・能力を発揮、伸長させるために、教科の学習内容を網羅しながら子ども達の生活や必要感に根差した単元を構想した。そして、資質・能力の観点から子どもの学びを見取り、評価することにした。

また、小学校では一昨年度から、子ども達の資質・能力が発揮、伸長される学びの場づくりについて研究を進めてきた。その際、各教科の学習において、子ども達が深く学んでいるときには、必然的に社会的資質・能力、汎用的資質・能力、固有的資質・能力が存分に発揮、伸長されていることに着目し、教室で子ども達が深く学ぶ際のプロセスに焦点を当てて教師の支援を整理した。その結果、「他者との対話」「対象との対話」「自己との対話」といった三つの対話を一つひとつの学習の中で実現させていくことで、友達と共に主体的に問題解決に向かう子ども達の姿を生

み出すことができると考えた。子どもの姿の表れとしては、これらの対話が同時に行われ、「他者との対話」「自己との対話」「対象との対話」は切り離してとらえられない場合が多くあるが、教師が一時間の授業を構成していくにあたっては、「他者」「自己」「対象」のうちどの対話に向けた支援なのかを区別して考えることで、一つひとつの支援と資質・能力を発揮、伸長している子どもの姿のつながりをとらえてきた。

このような単元や指導方法を、小学校では「年間学習計画」や「評価規準表」などのカリキュラムとして記録してきた。

## (2) 指導方法等は適切であったか

幼稚園で行なっている、多様な資質・能力の発揮、伸長を見取り、支えるために有効な手立ては、多様な資質・能力が発揮、伸長された姿を根拠として、子どもの事実を基にした実践記録やドキュメンテーション等に集積されている。また、汎用的資質・能力の問題解決力をねらいに示すことによる、思考の流れを意識した保育実践についても、実践記録やドキュメンテーションに記述することで、幼児教育の学びのプロセスを可視化することにつながっている。

6歳、7歳前半では、「年間学習計画」「単元ごとの評価規準表」「単元構成表」「評価補助簿」を作成し、授業後、単元のリデザインをすることで、単元の質や指導力の向上につながっている。

7歳後半～11歳では、「年間学習計画」「単元ごとの評価規準表」「資質・能力、発揮、伸長表」「単元構成表」を作成し、授業後、単元のリデザインをすることで、単元の質や指導力の向上につながっている。

先述の通り、小学校では、子ども達の資質・能力が発揮、伸長される学びの場づくりに継続的、重点的に取り組んできた。それにより、子ども達が単元を通して、また、一単位時間を通して、対話を重ねる中で「納得解（定義：両者が互いに共有できたこと）」を創造する学習を行うことができるようになった。また、授業者は3つの対話に向けた支援を意識することで、指導力の向上につながっていると考える。

## Ⅱ 実施の効果

### 1 児童・生徒への効果

より実質性を備えた「初等教育要領」の提案に向け、54の資質・能力を踏まえて構築・試行した延長期間における教育課程が、児童の自己評価や他者への思いやり、そして学びの基盤となる学習意欲に与える影響など、いわゆる非認知能力とどのような関係にあるのかを客観的に実証するための一方策として、本研究開発では、児童が自分自身を評定するタイプの心理尺度を利用してきた。それらは、有能感（3領域＋自己評価）、共感性（他者への共感的関心・他者の気持ちの想像）、学習動機（知的好奇心・因果律・達成・帰属・挑戦）を測定する尺度であり、尺度項目が記載された質問紙による調査を、これまでの6年間と同様の時期（7月）に同様の手続きにより、全学年の児童（6歳～11歳）を対象に実施した。

次ページ以降に掲載した【学習コンピテンス】から【挑戦】までの11種類の図は、各尺度得点の平均値を年齢（学年）別に示したものである。図中では、2013年度（指定1年目）から2019年度（指定4年間と延長3年目）における各学年の尺度平均値を示した。また、いずれの得点（【帰属】を除く）も、年齢が高くなるにつれて低くなること（【帰属】については一旦上昇しその後下降する）が、先行諸研究によって明らかにされている。したがって、7つの年度における結果を比較する場合、全体傾向としては尺度得点の平均値が下降していても、それが以前の年度ほど下降していなければ、教育課程の効果（少なくとも指定1年目の9月以降から延長3年目の6月までの取組・工夫の効果）が、有能感や動機等の非認知的能力に反映されてきたと判断できる。さらに、特定の年齢における大きな落ち込みが縮小していくなれば、研究開発の取組の年次進行にもなって、いわゆる発達の段差を生まないという効果もあったと考えられる。

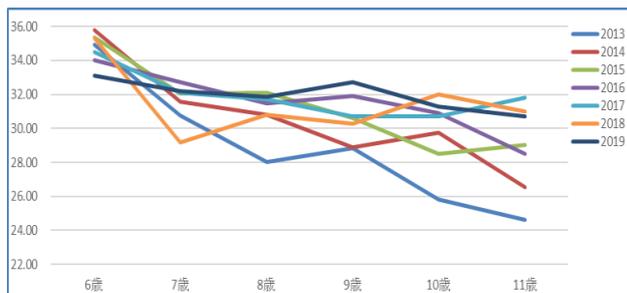
今回が最終年度であることを考えれば、まずは、これまでの7年間の中で、11の指標の学年進行に伴う低下傾向が年度を経るにしたがって留まっているかどうかを確認する必要がある。例えば、以下に示す「有能感」に関する下位尺度である【学習コンピテンス】【社会コンピテンス】【運動コンピテンス】【自己評価】の図を見ると、2013年度から2019年度にかけて一学年（年齢）が進行するにつれて一各年度いずれの尺度得点（平均値）の落ち込みは徐々に緩やかになっている。特に「全体的に自分をどのように評価しているのか」に関する【自己評価】においては、2013年度～2014年度、2015年度～2016年度、2017年度～2019年度との違いが明確になっており、研究

開発の年次進行につれて、児童の総合的な自己評価は高まってきていることが明らかにされたと言える。

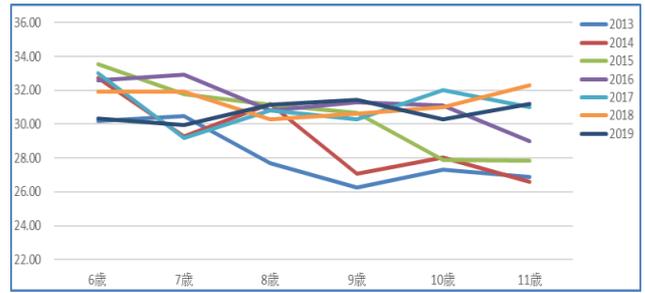
こうした学年進行に伴う各尺度得点（平均値）の下げ止まり傾向は、共感性に関する【共感的関心】および【気持ちの想像】、さらには学習動機（意欲）に関する【知的好奇心】【因果律】【達成】【帰属】【挑戦】においても確認することができる。10歳児および11歳児は、第1学年である6歳児の時点から、この開発研究のもとで新たな教育課程（初等教育要領の開発を目指した教育的環境）の中で学習をおこなってきており、その効果がここ2～3年間に見られる顕著な下げ止まり傾向となって表れていると考えられる。

さらに、今回が最終年度であることを考えれば、当初指定4年間と延長指定の3年間の比較にも意味があると思われる。なぜならば、延長指定の3年間においては、それ以前の4年間の初等初期で「資質・能力カリキュラム」、中期で「8領域」、後期で「教科等カリキュラム」といった発達段階に合ったカリキュラムに加えて、子ども達の資質・能力が発揮、伸長される学びの場づくりについての授業研究を導入しているからである。これら11指標の平均値の推移を年度別に丁寧に見ていくと、ほとんどの下位尺度得点（平均値）が、上述した【自己評価】の箇所でも触れたように、2013～2014年度、2015～2016年度、2017～2019年度という3つの束（群）に分かれている様相—下位尺度によっては、2013～2016年度と2017～2019年度という2つの束（群）に分かれている様相—が看取できる。これは取りも直さず、延長指定3年間の子ども達の資質・能力が発揮、伸長される学びの場づくりが奏功した成果であると判断できよう。

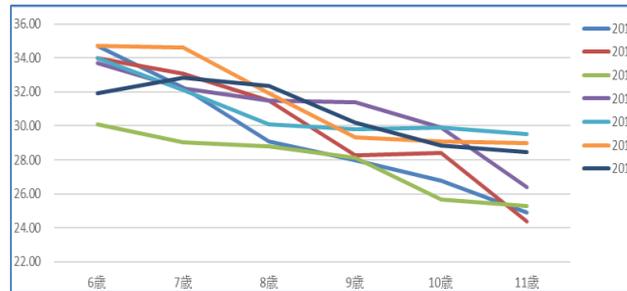
【学習コンピテンス】



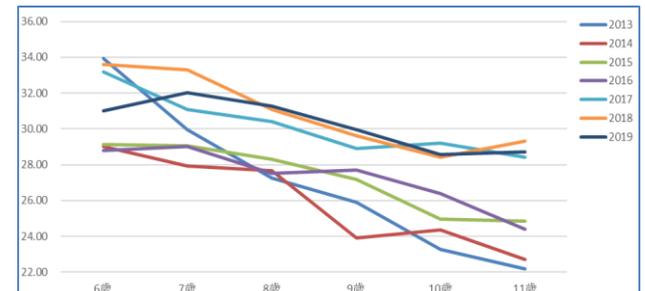
【社会コンピテンス】



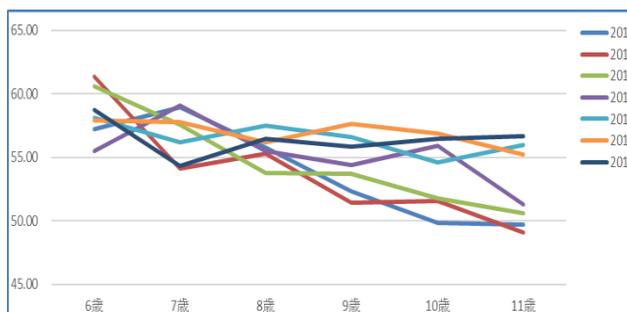
【運動コンピテンス】



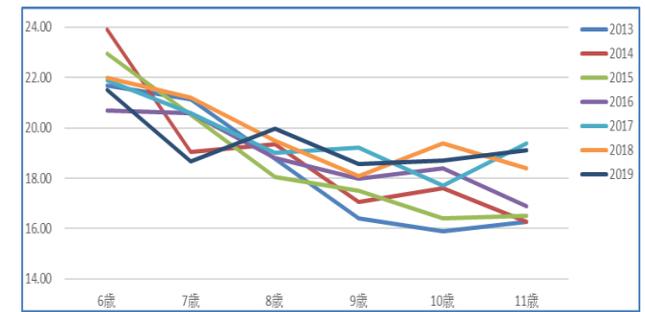
【自己評価】



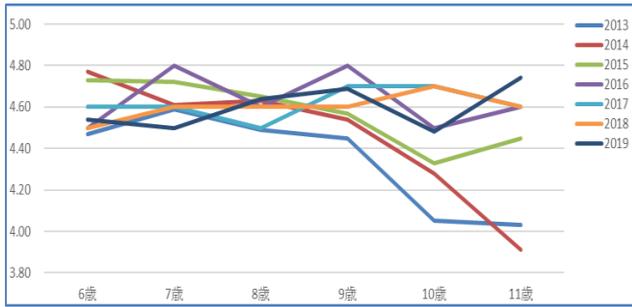
【共感的関心】



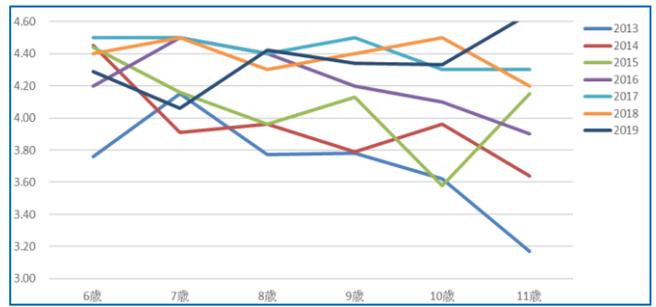
【気持ちの想像】



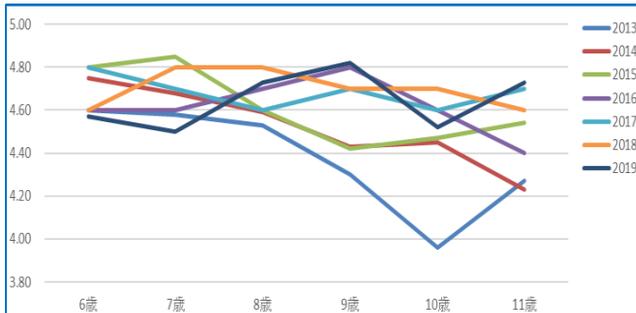
### 【知的好奇心】



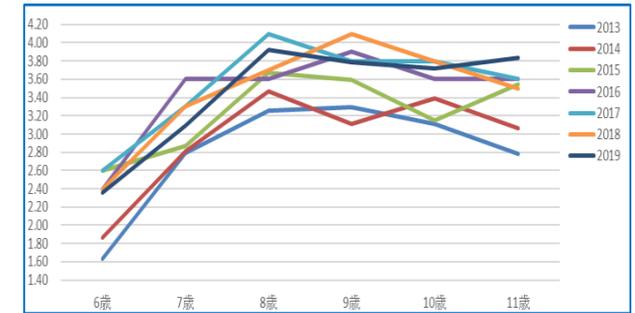
### 【因果律】



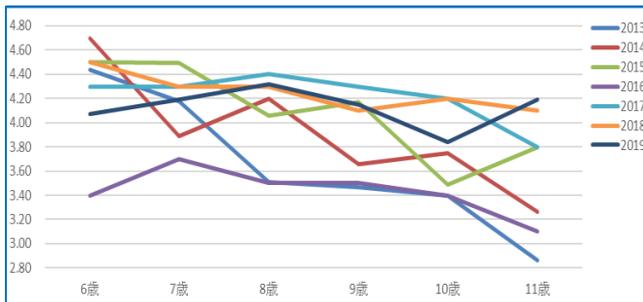
### 【達成】



### 【帰属】



### 【挑戦】



## 2 教師への効果

### ①子ども理解の深化

- ・実践記録を作成し、子どもへの声かけや行動を可視化することで、それぞれに意味付けができ、確かに子どもの学びにつながる援助であったことを確認できる機会にもなった。また一方で、今まで自然に出ていた自身の言葉や行動の中でねらいが曖昧な援助があったことに気付かされることもあった。その際には、子どものどの資質・能力を支えていきたいのかを明確にし、教師が深く意識して実践することで子ども達の姿も遊びや学びの質も変わっていくという実感できた。
- ・実践記録の作成、検討を通して、子どもの遊びの場や遊びを一つとして捉えず、子どもの行動と言葉、周りの刺激を一つ一つ噛み砕いてみていくことで、その遊びの価値や子どもの心の変化、資質・能力の理解が深まり、それによって子どもが夢中になっている遊びを多面的に見ることができてきた。また、事実を基に子どもの思いや資質・能力の発揮、伸長している姿を読み解いていく面白さ、実践して省察することの大切さを感じている。
- ・子どもが様々な資質・能力を発揮しながら、友達からの刺激や教師の環境の構成、援助によって新たに資質・能力を伸長させる過程を可視化した実践記録を職員同士で詳細に検討していくことで、実践者以外にもその時の子どもの姿がよく伝わり、その年齢のその時期の発達の様相を掴むことができていく。
- ・これまで行ってきた事実と解釈に分けて見取る作業をしたことで、子ども達の発言や行動を教師の勝手な解釈ではなく見取ることができるようになり、この見取りや支援を繰り返し行うことで、解釈の幅が広がり、子ども達の姿をより明確な根拠をもって見取ることができるようになっていく。またその根拠がどの資質・能力に位置づけるのかなどを考えることで、支援の方法を多面的に考え、子ども達に声をかけられるようになっていく。子ども達の資質・能力の発揮・伸長は学習だけにとどまらず、すべての場面で見ることができ、さらに支援の方法は1つだけではなく、その状況・場面によって、教師は子ども達の状況を見ながら、支援を打つことができるようになっていくと感じる。
- ・初等前期（7歳）の単元を作る中で、幼児期に育んできた資質・能力を意識するようになった。自分が支援する対象となる子どもが、「一般的な2年生」とするのではなく、今までにこんな体験、こんな学習を体験し、このような資質・能力を発揮、伸長してきた子どもとなったことが大きい。以前よりも、幼い子どもと見る面が少なくなり、体験や学びを積み重ねてきた学習者とみることができるようになった。
- ・高学年においても資質・能力の視点で子ども達の姿を意識して見取り、それらを発揮、伸長するための支援を考

え、子どもの育ちに関わることができたことは成果であると考え。しかもそれは、学習中のみならず、学校生活全般において意識できたことが大きいと感じている。

- ・子どもへの見取りについて、資質・能力を発揮、伸長する姿をどのタイミングで、どの行動で、どの表情で、どの言動でという見方で見ようとすることを意識できるようになった。幼稚園の参観をして、一つひとつの事実の裏にどのような子どもの思考が働いているのかを特に考えることができた。「遊び」を通して、子どもが何を考えて次に何をしようとしているか、その行動を行った理由にも考えを及ぼすことができた。幼稚園や低学年の参観で、事実と解釈に分けて、子どもの学びを見取るということは、大変分かりやすく、自分の学年にもその見取りを意識して行うようになった。

## ②幼小接続について（資質・能力カリキュラムも含む）

- ・資質・能力の観点を用いて保育を行い、振り返り、実践記録を作成、検討するなどすることで、子どもの学びや教師の援助について学べるだけでなく、資質・能力そのものについて考えるため、資質・能力への理解も深まっている。
- ・幼小で共に一年生の単元を検討する時間をもつことができた。幼小が実際の単元づくりを共に行うことにより、お互いが大切だと考えていることや子どもの学びの捉えを具体的に知ることができた。
- ・7年間にわたり、幼稚園とともに研究開発に取り組んできた。教育課程を含め、小学校の学習を構想することに幼稚園の教員とともに考えることが日常的なことになり、幼稚園・小学校の一体的な教育が進んでいったものと考え。幼稚園と小学校とが、初等教育を推進する場にあるということが普段に考えられる場を構成できたことは、今回の研究が研究にとどまらず学校園の運営にも作用していたと考える。
- ・幼稚園の保育参観に出向くことで、小学校低学年の学習とのつながりなどがより見やすくなった。環境構成や声かけなどには双方ならではの意図があり、その意図を知ることで幼稚園と小学校の接続がより明確な視点で見ることができるようになった。
- ・見取りについての取り組みは、教員が個々に事実を解釈するものではなく、幾度も検討を重ねながら同じものさしを基に見取っていくとする取り組みであり、教員の見取りの質的向上については、検討、共有する場を設定することで十分に担保することができていると考える。また、これらのものさしを幼小一体として共有・検討し、実践を重ねていくからこそ、幼稚園と小学校の円滑な接続に大きくつながっていると考える。
- ・今回の研究発表会では、前期部会での提案の場が設けられていた。そのため、幼稚園の先生とカリキュラムや研究について意見を交わす機会を多く設けることができた。資質・能力のめざす姿だけではなく、具体的に幼稚園の実践と小学校の資質・能力カリキュラムをいかにつなげていくべきかということをもとに考えるよい機会であった。
- ・前期部会では、資質・能力で学習のねらいを設定し、評価を行った。この取組を行うことで、学習を構想していく段階から、子どもの姿を細かく想定することができた。学習を進めていく上では、教科に密に関わる固有の資質・能力だけではなく、他の固有の資質・能力の発揮、伸長を意図的にねらい、みとっていくようになった。つまり、国語だから文字を書く、算数だから数をまとまりで捉える、という固定概念を取り払い、教科横断的に資質・能力を発揮、伸長できるよう支援し、見取っていくことができるようになった。
- ・幼小で同じ資質・能力をもとに見取ることで、目線をそろえて子ども達を見取ることができたと思う。また、5・6歳の交流では、幼稚園で行われている資質・能力を発揮、伸長するためにきめ細かな支援の仕方や環境設定を知ることができ、1年生を担当したときにはとても参考になった。
- ・共通の資質・能力をいう視点を持ち、幼稚園の保育や各学年の学習を参観する機会を持つことができたことで、幼時期からの9年間の子どもの育ちを意識しつつ、現時点での子ども達への支援を考えることができたことは大きな効果である。
- ・2年生後期以降は「教科等カリキュラム」で取り組んでいるが、54の資質・能力を形成的評価のための視点として使っている。これは、ある教科内容や付けたい資質・能力以外の資質・能力を見取り、支援し、発揮、伸長させる機会が学習時間内にはたくさんあるからであり、教科指導だけではなく、同時に生活指導、子ども達の社会性を育むなど様々な力をつけていくことが大切であると考えているからである。これは現在カリキュラム・マネジメントと言われている部分に直結する点である。計画的に資質・能力を発揮、伸長させることが子ども達をよりよく伸ばすことになることが理解できた。

## ③指導方法の改善と実践意欲の高まり（評価補助簿を含む）

- ・実践記録の検討を通して、自分自身の援助について考える機会になると同時に、よりよい援助について検討していく中で、新たな資質・能力の視点からの援助について学んだり、深めたりしていくことができた。また、実践者の行った援助が、自分の援助の引き出しを増やすことにつながっていると感じる。
- ・実践記録「お腹の中に赤ちゃんがいるって不思議だなあ」の検討をする中で、子どもの発言や姿の中に含まれる学びを他教師と検討することで、その時に気付けなかった要素（母音の韻を踏むことに関して）に気付き、その時に気付いていればできた援助を考えることができた。同じ場面でその反省を生かしていくことができる。
- ・子どもの資質・能力の発揮、伸長に向けて有効な環境の構成や教師の援助をより多く集積し、月の指導計画へ反映、充実させるために、実践記録の【Ⅱ】表に集積される資質・能力の発揮を支えた環境の構成や教師の援助を、主に検討時に探ることが多かったのを記録作成時にもより意識的に探るようにした。そのことで、自身の環境の構成や教師の援助一つ一つをより丁寧に振り返ることができ、意図したこととは異なる効果等の気付きからより多様な意図をもったかかわりへつなげることができた。さらに、同様の目的のために、研究保育時に子どもの資質・能力の発揮、伸長に向けて有効な環境の構成や教師の援助を集積した。そのことで、子どもの資質・能力の発揮、伸長の要因を探りながら観察することができ、事後の協議では、子どもの事実から資質・能力の発揮、伸長に有効であった環境の構成や教師の援助が検討、共有され、そのタイミングや言葉の内容、言い方等、詳細な振り返りができ、資質・能力の発揮、伸長に有効な指導方法が明らかになることにつながった。
- ・学年が異なる事例であっても、同じ遊びをしていることも多々あり、その遊びならではの学びを考える機会になると同時に、そのための教師の援助や環境の構成を考える機会となっている。
- ・他教師の実践を見ることで、同じ場面を見ての話し合いができ、教師の援助や環境構成の工夫や、それが子どもの主体的な活動につながっていることを学ぶ機会となった。また、自分の保育に取り入れられるところを考え、

- 試してみたり、それにより反省したことを改善したりと、より自分の保育を立ち返り充実することができた。
- ・評価補助簿の開発を行ったことにより、子ども達の資質・能力が発揮、伸長されたタイミングで教師が記録していくことが可能になった。また、記録したことが自動的に一人ひとりの個票として集積されるようになったため、どの子どもが一年間でどのような資質・能力を発揮、伸長してきたのを見取ることができるようになった。
  - ・評価補助簿を使用することによって、事前に発揮、伸長をねらう資質・能力のめざす姿を設定し、その視点で確実にみとろうという意識をもつことができる。指導と評価の一体化といわれるように、評価を指導に活かしていかなければならないが、何を見取り、何を活かすのか明確になっていないまま学習をスタートしても結果的には成果物やノートの記述のみの評価になることが多いといえよう。そのため、今回のように、補助簿で評価し、その評価をもとに次の支援を考えることができやすくなった。
  - ・今年度 ICT 機器を活用した評価補助簿を開発することで、子どもの学びを見取り、それを評価し、学びへフィードバックしていく一連のプロセスがより円滑となった。同時に個々の見取りを丁寧に行うという、当たり前のことだが非常に大切かつ難しい視点をあらためて持ったことは収穫である。今後も一人一人の学びに寄り添う授業づくりを意識していきたい。
  - ・ドキュメンテーションを作ることで、遊びの過程や子供が楽しんだり学んだりしているところを再確認し、より遊びを面白くするためや子供同士をつなげるために必要な環境構成や言葉かけなどの今足りていない援助や、遊びに必要なものを自分で気付いて選んだり工夫したりすることなどの自分で学ばせたり感じさせたりしたいことが、自分の中で明らかになってきた。
  - ・丸く作った粘土をお父さんやお母さん、子どもに見立てた友達の言葉を聞いて、「面白～い。」と言った子どもの事実から、その子どもの学びを、見立てた友達の考えを面白いと思う「他者のことを知る」資質・能力の伸長であると解釈し、その方向の育ちに向けて援助していた。しかし、実践記録の検討において、子どもの学びは、見立てた友達の作品そのものの表現を面白いと思う「造形に表す」資質・能力の伸長であると解釈し直すことで、その方向の育ちに向けて援助すべきであったと気付いた。一つ一つの子どもの事実を資質・能力の詳細な観点で丁寧に解釈すること、職員同士で子どもに対する捉えを出し合うことで、子どもにとってよりよい援助にしていることができていると実感している。
  - ・フライパン作りの実践事例を検討していく中で、教師は子どもの言葉を言い換えたり繋げたりすることを考えていたが、その子ども達の姿をみると、子ども達同士で考えを出し合ったり、決めていったりできることに気づき、見守ることや子ども同士でやりとりできるような言葉かけをすることに気付いた。それをすぐ反省として、次の日に活かしていくことができた。
  - ・本年度も社会的資質・能力の実践記録の集約をし、検討会を行うこととともに、幼小で社会的資質・能力のめざす姿の検討を行うことで、一つ一つの社会的資質・能力に対する理解を深めたり、同人で共有したりすることができたことによって、より学校として幼稚園と同じ目線で子どもをはぐくむことに一歩近づいたように感じた。単元を構想する上で、資質・能力の発揮、伸長を意識し、指導方法を考えることができた。特に、社会的資質・能力に関しては、本研究を進めていなければ教科の学習ではなかなか意識しなかった点である。そして、社会的資質・能力を意識し、教科の指導方法を考えることにより教科内容だけではない視点を取り入れることができ、指導に幅を持たせることができた。例えば他者を賞賛する資質・能力の発揮をねらった学習において、「○○くんの図がわかりやすかった。」というように、他者の考えの素晴らしさを意識して聞き気付くようにするとともに、算数の図形の見方を新しい視点で捉えて見方を深めることができた。また、具体的な姿を設定することで、それらが、発達段階に合っているのか（適切であるか）、我々の見取りにずれがあるのか、分別して見取ることが難しいものであるのかなどを考える良い機会であった。今後より資質・能力を伸長させる支援を考えていきたい。
  - ・学期末にカリキュラムの検討をし、教育課程のどの部分の事実が足りていないか確認しておくことで、次年度の始めから意識して取り組むことができた。ドキュメンテーションや実践記録作成時に、教育課程の検討部分に当たる事実がないかを検討し、記録に残していこうとする意識が高まった。

### 3 保護者等への効果

本教育課程についての保護者説明会を実施した際、次のような感想・意見が寄せられた。この結果、保護者から一定以上の関心、理解及び期待を得ており、本研究開発の推進に資する協力が望めると考えている。今後、全体の感想・意見を集約した上で、教師全員での共有を図るとともに、保護者からより一層の理解・協力が得られるように活かしていく。

- ・2年生(7歳途中)での自発的な学びが大事であり、前期と後期を分ける点が興味深く、研究に基づいた学び方を、幼小を通じて実践できることで子どものもっている可能性をさらに広げられると思います。
- ・幼稚園での生活は「無自覚的な学び」の積み重ねだったので、それを踏まえた上での小学校カリキュラムを組んで下さっていることはとても素晴らしいと感じます。
- ・幼小9年間の学びで、幼稚園からの学びの連続やその延長に、教科をさらに深い学びへとつなげることで、さらにはそれが「自己評価の高さ」や成長につながるのだということが分かりました。
- ・1つの学年の中でカリキュラムを変えていくことにより、単元と教科のつながりをもたせる事は、とても良いことだと思います。また、自分と他者との納得解を考える事は、自分自身と向き合うだけでなく、他者理解も同時に深められる人に育っていくと思います。
- ・資質・能力を定義づけることで、支援する必要性が明確化され、すべての先生方に意識的に支援していただける仕組みが作られる事について、一般的には、先生方のそれまでの経験によって指導されることが多いように思うので、是非、公立小学校等へと取り組みを広げていただきたいと思います。
- ・2年生から3年生への育ちの伸びは大きいように感じます。発達の節目が7歳の中にあるのではないかとされていたことに、大変興味をもっています。幼稚園での学びが基になり、小学校の学習へつながったり、小学校の学びを基により深められていく学びがあったりするこの9年の育ちは、大切だと感じています。
- ・今年度も引き続き54の資質・能力を軸にした、様々な授業や学習がその能力を発揮、伸長されるために、重要な

役割を担っているのだと感じました。単元という見通しをもって学習をする事が、学習の主体者として学んで行くことに必要であると感じました。

- ・昨年度、我が子が2年生の1年間の中で大きく成長するのを実感しました。そこに境目があるというのは納得できました。
- ・幼稚園から小学校での学びの連続性・一貫性を可視化するという内容、理解致しました。子ども達それぞれの資質・能力が発揮、伸長される環境づくり、体制を行っていただいているということで、家庭としても同じ方向を向いて意識して関わっていききたいと思います。
- ・発達の節目の年齢に無自覚的な学びから自覚的な学びになるということで、細かく単元を組み替えられることが成果につながると良いと思いました。
- ・資質・能力の観点を教員がもつことで、その時に適切な支援をすることができるというお話を聞いて、親としてもその時々の発達段階に応じた適切な支援を考える必要があると思いました。
- ・日本の教育の向上に少しでもお役に立てているのではと、この学校の存在意義を強く感じます。実際に昨年度の2年生の子の親として、前期と後期でのふりかえりカードの書き方の成長には驚かされました。子どもは自然のまま、保護者が研究に対する意識を少し強くもつことで、子どものよりよい成長につながるのではと思います。

### Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

#### 1) 幼稚園

幼稚園では、引き続きフォーマットを工夫しつつ、実践記録やドキュメンテーションを作成、検討し、データの継続的な収集を行う。そして、そのデータを用いて初等教育要領や教育課程、月の指導計画、遊びや生活のまとまりとしての計画を充実する取組を継続して行う。また、研究保育時の観察、記録により集積している資質・能力の発揮、伸長を支える手立てを整理し、月の指導計画へ反映し、実践の充実に向けて取り組んでいく。さらに、幼児教育における指導方法の中で、小学校の低学年教育においても生かすべき指導方法を明確にすることを目指す。

根拠となるデータの質を高めてきたが、データの量という観点からは圧倒的に不足している。現在は、「幼児教育の性質上、数値化された客観的な評価が行えるわけではない」という現実があるが、めざましいICT技術の進歩があり、今後、ICT技術を用いた取組により、量的にも信頼に足るデータの集積が可能になることが予想される。その先進的な方法を神戸大学と共に行っていく必要がある。

#### 2) 小学校

本研究を継続することが、さらなる成果を生むと考えている。もちろん、この7年間の研究が成果のみを生んできたわけではない。今後の本校の在り方を考えていく上で、下記の課題について改善する必要があると考える。

- ① 54の資質・能力で子ども達を見取り、支援するために、個々の教員の子どもを見る目、関わり方に関わる資質の向上を目指す必要がある。小学校教員の多くは、まだ54の資質・能力を使いこなすというレベルまで至っていない。幼稚園教員からさらに学んでいきたい。
- ② 資質・能力がよりよく発揮、伸長される単元づくりに取り組み、①年間学習計画、②単元ごとの評価規準表、③資質・能力発揮、伸長表、④単元構成表を作成してきた。これらは、教科、領域の学習を行う上で、54の資質・能力の発揮、伸長をねらい、支援し、そしてまた、子ども達の姿を見取り、支援するというように絶えず繰り返すため作成している。今後も、これら4点の実践、修正を繰り返し、資質・能力がより発揮、伸長される単元を創り続けていくことが大切である。また、6歳、7歳前半に関しては、「評価補助簿」を使つての資質・能力を発揮、伸長した姿を見取り、「評価補助簿」の蓄積、改善も合わせて行う必要がある。
- ③ 6歳、7歳前半の「資質・能力カリキュラム」での授業を多くの教員が経験する必要がある。平成31年度を含め、本校で6歳、7歳の担任をした教員は半数にも満たない。日々の取組や研究実践での公開による共有は行っているが、担任をすることで初めて実感し、理解できることも多くあると考えるからである。また、これは、「教科等カリキュラム」の単元をつくる際、教科の視点を大切にすると同時に54の資質・能力を強く意識できるはずだと考える。
- ④ 「グローバル英語教育」の理念を共有し、単元開発を進めてきた。今後はさらに実践を積み重ねると同時に、文部科学省から提案される「外国科」、「外国語活動」の動向を十分に把握した上で、「グローバル英語教育」の方向性を見定めていく必要がある。
- ⑤ 幼稚園教育と小学校教育の接続期と考える5歳から7歳を、新たな低学年教育として形作るために、「自発的な活動としての遊びを大事にした保育」から「子ども達の生活や必要感に根差した単元」、そして、教科へ移行する時期をさらに探る必要がある。本校園では、7歳半ばで「教科等カリキュラム」を始めているが、教科によって開始時期が異なるという可能性をも探っていきたい。